

池田大作の調和と管理の思想研究

陳 曉 春・譚 娟

はじめに

調和管理は、物事の均衡と協調状態を成し遂げるためのものであり、さまざまな要素を調和させて効率的に任務を完成させる過程である⁽¹⁾。調和管理は、人間の本質的な属性から着手する必要がある、人間の消費的属性、生産的属性、及び文化的属性に配慮する必要がある。池田大作は以下のように指摘している。「人として知、情、意の不均衡はある意味では必然である」。倉廩満ちてすなわち礼節を知る。礼儀を知ることで物質的な豊かさを得る。「礼義廉恥、国の四維」——調和管理の実現には文化、道徳、理想を持った人間を養い、人間の真、善、美という徳性を涵養することを強化しなくてはならない。池田大作いわく、「自由と秩序というのは、人間の尊厳として存在していることを認めることを大前提として、初めて真の意義をもたらすことができる。自由は人の本質的な特徴で、自由な人がいなければ、調和社会の活力と持続可能な発展の原動力が足りないということになる。しかし、自由は必ず秩序をもって前提とし、秩序も自由に帰結している。自由は機能性の原理であり、秩序は構造的原理である。自由と秩序は人間の尊厳という結び目によって、調和に達する。人間社会には、地球村の村民一人ひとりに存在の尊厳、享受の

(1) 「管理」という言葉は中国古来から存在した。ただしその詳しい定義については複数の解釈が成り立つ。字面から判断すると、管理は「管轄」「処理」「人の管理」「事柄の処理」といった意味を持ち、一定範囲の人や事柄を手配・処理するということになる。

管理の定義は、広義と狭義に分けられるが、本論文における管理とは広義の内容を指しており、他者を通じて活動を完了させることを表す。活動を管理することは、一定の環境条件において展開されるが、環境は出会いや機会を提供するものであるとともに、挑戦や脅威が存在するものでもある。この環境の存在を正しくとらえ、一方では優れた社会の物質的環境や文化的環境を創造するために組織を作り、努力することが必要となる。他方で、管理の理念や方法は、環境条件にしたがって臨機応変に対応できなければならない。

本論文中の「人の本質・属性にしたがって調和のとれた管理（和諧管理）を行う」、「人の尊厳とは、自由と秩序とを有機的に統一し調和するよう結びつけることである」、「共生の精神で調和の取れた世界を構築する」という文言は、池田思想の精髓であるが、中国の伝統的な文化においても、人員の分業、共同、組織、指揮、指導、統制の重要な運用方策であり、秩序ある管理環境と文化的基礎を根本から実現することを意味する。中国伝統文化の影響は長い歴史をもつが、その中から中国独自の課題に対する管理の道を探ることは、少なからぬ意義を持つと思われる。

尊厳と発展の尊厳をもたせるべきである」⁽²⁾。

共生とは、異なる人間あるいは組織が、各自の欲求（生存、発展など）に応じるために、各自の相対的に優位な位置に立って、互いに釣り合いをとりつつ、相互提携と共同発展を通じて互恵共栄を達成することにより形成された状態をさしている。私たちが思うのは、共生関係の上で生まれた「共生気質」は、共同体が仁愛、調和、寛容、忠孝、進取、超越などに基づいて用いる処世の方式である。これは共同体が自我の道德修行を通して、天、地、人に広大な気持ちをいんだり責任をとったりする徳性と気質である。池田大作は現在も「共生の道德気質」を人類未来の目標としている。もし「共生」という思想を広範囲に広め、人類社会のさまざまな問題を解決するために「大同」という思想を用いれば、そして「共生気質」によって、国と国、民族と民族の共通点を求めれば、調和世界を創造する念願がかなうに違いない。これが池田大作の調和管理の思想宝庫における至宝であり、本稿ではそれをいくつかの方面から探求していこうと思う。

1. 人間の本質属性から調和管理を行う

調和管理は、主に人間を中心にする管理過程である。社会経済生活の中で人間とさまざまな資源をよく配置し、調和の域に達するために、人間本質の属性から着手しなければならない。つまり、人の本能を研究し、人間の消費属性、生産属性、文化属性を注目するということである。孟子いわく、「天時は地の利に如かず、地の利は人の和にしかず」（時は自然の状況にはかなわず、その自然状況は人の輪にかなうことはない）。人間と生態、人間と宇宙空間の関係において、人の和は非常に重要なことであり、依正不二、すなわち生命体から創造された調和は天人合一（人と自然の調和）の重要な要素である。人間の内在的な本性は、生命の創造力の本来の源泉から起こった、あるいはそこから受け継いだものである。生命本能自体は、2つの再生産を行う。1つ目は、種の生産を継続させること、つまり生殖などの本能的な活動である。2つ目は、人間の肉体の存在を保証するために行う生産である。つまり、物質生産性労働である。マルクスが述べたとおり、「生産生活はもともと類生活（或る種の生活）で、命を生む生活である。或る種のすべての特性、種の類特性は命の活動の性質におけるものであり、人間としての類特性は自由であり、自覚的な活動である」⁽³⁾。松下幸之助は「欲望そのものは生命力の現れである」と考えている⁽⁴⁾。池田大作は「本能は人間と動物の生まれつきある本質と能力で、欲求の一種である」⁽⁵⁾、「欲求は生命が自分自身を維持して充実するための動力である」⁽⁶⁾と述べた。池田大作は、調和管理の本質を深く分析して調和管理の理論体系を作り上げるため、欲求を4類に分けている。1つ目は本能的欲求、2つ目は人と人および社会との関係から生まれた欲求（気持の欲求と称する）である。3つ目は知識、真理、美、愛などに関わる欲求（精神的な欲求と称する）である。4つ目は、

⁽²⁾ 池田大作、松下幸之助『人生問答』卞立強訳、北京：中国文聯出版社、2000年、14頁。

⁽³⁾ 『マルクス・エンゲルス全集』第42巻、北京：人民出版社、1979年、96頁。

⁽⁴⁾ 池田・松下『人生問答』、14頁。

⁽⁵⁾ 池田・松下『人生問答』、15頁。

⁽⁶⁾ 池田・松下『人生問答』、14頁。

人間の命がそれを生む大宇宙生命のなかに浸って、大宇宙生命とお互いに融合しあう、もしくはお互いに融合しようとする根本的な欲求（宗教的欲求と称する）である⁽⁸⁾。上述の欲求について、4種類の分類は人間生命に内在した欲求の段階性を研究する。また、人間は自分の異なる種類の欲求を満足させるため、さまざまな動機を生み、自分の行為の目標を定め、それによって絶えず生命力に満ち溢れ、引き続き追求し、社会経済の各種の活動に参加し、社会の各分野、家庭の各種の矛盾を適切に処理し、物事を首尾よく円満に解決する法則性を探求する。

アメリカの人本主義心理学者のマズローは、欲求を5つのレベルに分けた。それは、生理的欲求、安全的欲求、情緒的欲求、尊重的欲求、自己実現の欲求である。調和管理においては、人間の衣、食、住、医療に対する基本的な欲求を満たすだけでなく、さらに、生理的欲求を満たした後の安全欲求、友情、愛情、帰属などの欲求にも注目すべきである。他にも、人間の真、善、美、公平、円満および法律などのさらに高いレベルの動機あるいは欲求を満たすことも必要である。マルクスとエンゲルスの欲求レベル理論によると、生存欲求と享受欲求が満たされた後の、発展の欲求に注目する。ある程度人間の物質的欲求を満たすことは管理が順調に行える基本的な条件であり、ある地域ある国では食事さえできない状態で調和を語ることは意味をなさない。同時にある地域、ある国、ある組織は不公平に分配を行い、社会の富の格差が大きくなったことも人間に心理のバランスを失わせ、社会変動の要因となる。そのため、経済成長が物質的富を創造するなかで、能率と公平に注意することは調和管理の必要条件である。

人間の物質欲望を満たすことは調和管理を行う必要条件であるが、十分条件ではない。人間は衣食の問題を解決してから、精神生活を求める。人間は物質的富を創造し、生理的要求を満たすとともに、人間自身の自由と人類の発展要求を満たすために、精神的な富を創造する。「人類にとって、自身の生存にしても、発展にしても、世界の認識にしても、世界の改造にしても、絶えずに様々な文化からの要求が起こる」⁽⁹⁾。また、「私たち人類が必要としているものは食物、水、家だけでなく、報酬がある仕事、自尊、社会から認められるだけでなく、ある生活の目標、実現したい夢、責任を負うことである」⁽¹⁰⁾。そのため、人と自然、人と人との矛盾を真に解決するために必要なことは、人間の心を統轄し、人間を励ます先進的な文化で規律し、導き、影響を与えることである。先進的な文化の力はそれぞれの要素を均衡させ、さらに経済を発展させ、民主を健全にし、科学教育を進め、文化を繁栄させ、社会を調和させ、国民の生活を豊かにさせ、自然人という存在から知識人への転換を実現させる強い動力なのである。ある意味からいうと、「知礼仪仓稟实」（倉廩満ちてすなわち礼節を知る）である。知識は生産力で、人の精神力も物質を創造する力にすることができる。礼（礼儀）、儀（正義、義理）、廉（清）、恥（廉潔で恥を知る）は、人間の核心的な価値体系だけではなく、ある地区、ある国の調和と安定にもつながっている。先秦（春秋戦国時代）の古典「管子牧民」が描いたように、「国の四維、一維が絶えたら傾く、二維

⁽⁸⁾ 池田・松下『人生問答』、14頁。

⁽⁹⁾ 李金齊「文化自覚、文化創造及び調和文化世界の構築」『探索と争鳴』上海、2007年、21頁。

⁽¹⁰⁾ アーヴィン・ラズロ『ブダペスト・クラブ全世界的問題最新報告—第三番目の千年』、北京：社会科学文献出版社、2004年、147頁；李金齋「文化自覚、文化創造及び調和文化世界の構築」、22頁。

が絶えたら危ない、三維が絶えたら覆る、四維が絶えたら消える。傾いたり、危なかったり、覆ったりした場合、直すことができるが、消えたらもう直せない。四維とは礼、儀、廉、恥ということである」といえる。「礼儀廉恥、国の四維」という哲理は、「調和社会において法律、制度、政権の拘束は免れない、また、人々の理想、信仰、情操（高次の感情）、風俗、習慣などの要素も調和管理には要ることである」ということを表す。

そのために、私たちは調和管理を実現するには文化、道徳、理想をもつ人を養成すること、人に真、善、美の習得を強いる必要がある。池田大作が述べたとおり、「知、情、意とは人間の精神的な3種類の機能である。ここで、知は知性、理性の機能、情の意味は感情で、情念（強い感情）などの機能で、意は意志、意欲という意味だ。人間において、知、情、意のある程度の不均衡は必然的なことかもしれない。私たちも自分の生命を明らかにする、堅い意志がある、豊かな心情と知性の光が輝いている、主体的な自我を確立させるための努力が必須である」⁽¹¹⁾ということなのである。

知、情、意の円満な調和、不均衡から均衡までは簡単な循環ではなく、個人と社会の共同発展の過程であり、この均衡に達成する過程で個人が自由で全面的な発展をする調和関係を確立することができる。

2. 人間の尊厳は自由と秩序が有機的に統一する調和的な結び目である

14世紀にはじまり16世紀において最も栄えたルネッサンスは、人間の尊厳を強調した。ミランダの『人間の尊厳』はその時期の代表的作品である⁽¹²⁾。ルネッサンスの最も大きな成果は観念の面で真実の個人を復活させ、抽象的で、集团的で、従属的な人間を否定して、個人と個体の価値、尊厳と偉大さを肯定し、個人がいかなる集団の従属者になるべきではないと断定して、個人が自身の運命の支配者だと主張した。すべての人は独立した小さい宇宙で、すべての人は無限の潜在能力を持ち、その無限な潜在能力を実現する権利があるというヒントを、ルネッサンスは私たちに与えてくれた。「これこそ近代的な民主文明とその制度体系の観念の基礎」⁽¹³⁾と劉軍寧は述べている。池田大作は人の尊厳を極めて重視し、「人の尊厳」という「鍵」を使い、「自由と秩序が矛盾である難問」という「錠」を開けた。これはヨーロッパのルネッサンスと同じように重要な意義を持つだけではなく、調和管理にとっても極めて重要な問題を解決した。池田大作と松下幸之助の『人生問答』の対話の中でその答えが容易に探し当てられる。

松下は「自由が極端になると、秩序は混乱しやすい。秩序を重視すると、自由を失いやすい。世界の多くの国家はそれぞれ偏っているので、様々な問題が生じたようである。いったい自由と秩序を両立させると同時に社会を繁栄させる方法はあるのか。」⁽¹⁴⁾と述べた。池田は「自由と秩序は、ただそれらを一人の尊厳であることを承認するという大前提を通じてのみ、本当の意義が

⁽¹¹⁾ 池田・松下『人生問答』、14頁。

⁽¹²⁾ 劉旭光「わが国には一体どんなルネッサンスが必要か」『探索と争鳴』上海、2007年、19頁。

⁽¹³⁾ 劉軍寧「中国ルネッサンスを起すべきだ」『南方週末』2006年12月7日、B15。

⁽¹⁴⁾ 池田・松下『人生問答』、149頁。

生じうる。今日の私たちは歴史上の多くの経験から多くの知恵を獲得した。例えば、自由を束縛することは人間にとって主体性と創造性を剥奪する不幸な状態ということを認識した。秩序がないことは社会を混乱させ、人間の生活を脅す不良な社会の状態である。そして、自由（社会の行動の幅）を拡大することと社会の秩序を維持することとを両立させる方法を久しく探している。ヨーロッパでルネッサンスから始まった封建社会の崩壊と、近代の市民社会の誕生の過程は、人間の尊厳が学術面や、宗教面、および実践面で再び承認されたことと同一の軌道で行われたのである。秩序と自由は、もし目的を明確にすることができれば、お互いに矛盾しないで、自動車のエンジンとブレーキのように、両者とも必要である——このような道理を理解してからこそ、それらを正確に運用することができる」⁽¹⁵⁾と述べている。

自由は人間の本質的な特徴で、自由な人間を欠くと、調和社会の活力と持続可能な発展の原動力が不足することになる。しかし、自由は必ず秩序をもって前提とし、秩序も自由に帰結している。自由と秩序の有機的な統一があれば、調和管理を通じて秩序立って自由に満ちた社会を築くことができる。また、生命の尊厳をよく考慮してこそ、自由と秩序は、人間の生命権・享受権・発展権が尊重され保護されていることによって輝きを放つ。

『周易』は人類の管理の行為を「経綸」にたとえている。経綸の意味は纏れた糸を整理して、糸口を見出し、乱れた無秩序の状態を規則正しく整然とした秩序ある状態に変える。『屯卦・象传』では「云雷・屯。君子以经纶」と述べている。「屯卦」



の卦象からみると、「坎」は上で「震」は下である。「坎」は「雲」で「震」は雷である。雲は雷の上にあつて、雨が降りそうだが降っていない。それは剛と柔が交わり始めたばかりでは、陰陽がまだうまく融合していないことを現しており、「屯難」の世を象徴する。天体現象から言えば、これは天地が作られたばかりの時、雷雨の動きは宇宙に充滿して、混沌とし、万物が目覚め、活気にあふれているが、困難に満ちていて、世界中は乱れている無秩序な状態を呈している。人事にとっても、それと同じように、調和のとれた秩序はまだ築かれていないので、社会はおよそ安定していない。天道を参考にして人事を明らかにする、剛健で立派なことをなすという姿勢が提唱されるべきである。纏れた糸の整理のように、糸口を見出し、縄を編むことによって無秩序な状態を秩序がある状態に変える。『周易』によると、宇宙と自然の組織は2つの異なる方面が共に構成したものである。一つは陰陽を区別することで、もう一つは陰陽を融合させることであり、両者とも不可欠である。『系辞』では「天地絪縕、万物化醇。男女构精、万物化生」と述べている。「天地」「男女」は陰陽の区別を示す。「絪縕」と「构精」は陰陽を融合させることである。陰陽を区別することは、天は尊く地は卑しくて、男女は違い、それぞれお互いに相対して、自分の役割につく。それは構造上、段階的で正常な秩序を表す。陰陽を融合させることは、天は地と互いに反応して、男性と女性の営みによって、万物を生み出し、活力が満ちあ

⁽¹⁵⁾ 池田・松下『人生問答』、150頁。

ふれている。それは陰陽の機能の面では完全に打ち解けて一体となった調和に表れる⁽¹⁶⁾。

人類社会で、自由と秩序は矛盾しつつも、統一しているのである。自由は機能的原理で、秩序は構造的原理であり、『周易』が述べるとおり、陰陽の区別も、陰陽の融合もある。自由と秩序は人の尊厳を通じて結ばれ、陰陽の区別と陰陽の融合の動態的なバランスの中で調和の状態に達する。まさに『周易・象辞』が述べているとおり、陰は陽と成り立ち、陽は陰を得ることのみ秩序立ち、剛と柔のバランスを保つことを和と称し、万物はそれぞれその和を得て生まれる。人類社会は地球村のすべての村民に生存の尊厳、享受の尊厳と発展の尊厳を持たせるべきである。

3. 共生気質によって調和の取れた世界を構築する

池田大作は共生を調和管理の理論的基盤として、共生気質によって調和の取れた世界を構築することを推進している。まさにインドのチャンドラ博士が以下に述べたとおりである。「池田先生はアショーク王と同じように、半世紀以来『法華経』の精神を終始し貫徹し、自分の使命として人類の幸せと世界に平和にできる限りの力を注いでいる」⁽¹⁷⁾、「池田先生は分断された人類のうちの存在と外の裂け目の間に橋をかけ、物事と価値を一体化させることを工夫している。人間の存在に意味を新たに見出し、それを表現することで、変わらぬ方針を提供してくれた」⁽¹⁸⁾。

経済のグローバル化および消費本位主義によりもたらされた衝突に対して、池田大作はインドと中国の優秀な伝統文化から解決方法を見つけた。「人類は今のところ、数多くのグローバルな問題に直面している。特に環境問題について、世の中は今、東洋の自然観、すなわち、『自然と人類は本来なら一体である。自然そのものはこの上なく貴重である』という理念を通じて、全世界の共通認識をすることを望んでいる」⁽¹⁹⁾。チャンドラ博士が「共生」の思想ならびに多元の「意思」を通して環境汚染、資源不足、国境紛争などに対応することを提唱した時、池田大作は、とりわけ注目されるべきことは中国社会に語り継がれてきた「共生気質」だと述べた。なぜなら中国の民情は対立よりも、融合を求め、分断よりも結合を大切にし、個人よりも集団の方に意を用いるのである。そして、人と人、人と自然とのさまざまな多元的段階を尊重することで共生共栄を追求することができる社会だからである。康有為らの提唱した思想は「共生の気質」を受け継いだと言えるだろう⁽²⁰⁾、と述べている。これに対して、チャンドラ博士は次のように述べている。池田先生は今まで「共生の道德気質」を人類未来の目標としている。言い換えれば、人類が重視すべきことは「抑圧」ではなく「協調」であり、「私」ではなく「私たち」である⁽²¹⁾。

共生理論は生物学の理論であり、社会科学の理論でもある。共生概念は1879年、アントン・ド

⁽¹⁶⁾ 方立天、薛君度編『儒学与中国文化の現代化』北京：中国人民大学出版社、1998年、250頁、260頁。

⁽¹⁷⁾ 池田大作、ロケッシュ・チャンドラ『東洋の哲学を語る』明報出版社、2005年、67頁。アショーク王、古代インドを初めに統一したマウリヤ朝の第3代の王。仏教に帰依し、理想政治を施した。

⁽¹⁸⁾ 池田・チャンドラ『東洋の哲学を語る』、Ⅶ。

⁽¹⁹⁾ 池田・チャンドラ『東洋の哲学を語る』、186頁。

⁽²⁰⁾ 池田・チャンドラ『東洋の哲学を語る』、186頁。

⁽²¹⁾ 池田・チャンドラ『東洋の哲学を語る』、251頁。

バリーによってはじめて定義されて、違う生物と一緒に暮らす状態を意味する。生物学における共生は、二種類の生物が各自の必要（捕食、防衛、繁殖など）を満たすために組織された戦略的な連合である。社会科学の面から見ると、共生は成長、発展、機会と互惠共栄を意味する。管理学の面から見れば、共生は異なる人間あるいは組織が、各自の欲求（生存、発展など）に応じるために、各自の相対的に割と優位な位置に立ち、互いに釣り合いをとって、相互提携と共同发展を通じて互惠共栄に達成することによって形成された状態をさす。共生関係はそれぞれの共生単元の間に物質、情報、エネルギーの関係を反映する。共生関係を発展させるのは実質的には共同体の物質、情報、エネルギーを有効的に発生、交換、配置させることに当たる。その上に、共生の過程には必ず新たな共生エネルギーを生むことも共生関係の本質を表現する。このエネルギーは共生関係による増加された純エネルギーである。共生エネルギーを生まない共生関係は継続しがたい。

したがって、共生気質については次のことがいえる。共生関係のもとに生じた「共生気質」は共同体が仁愛、調和、寛容、忠孝、進取、超越などの精神に基づいてとった处世の仕方を意味する。共生気質は、共生の主体が道徳と理性の面から人間の主体自覚価値と意義を高め、尊敬し、そして高揚させることを体現している。内在的品格を昇華するために自我の道徳生命の完全性を求める。一方、外在的期待に達するために、客体の社会構造を完全なものにすることを追求するのである。すなわち、共生気質は、共同体が自我の道徳鍛錬による天、地、人間に対する広く豊かな思いであり、進んで責任を取る人品と気質である。そういう共生気質の影響で、人間は多元文化を認めることができるし、一人一人の価値や、集団の価値と自然の価値が相容れるようになる。ゆえに共生気質は互惠協力、相互活性、共同適応、共通の発展や繁栄に至る調和世界を構築することに対して、積極的な理論的意義と現実的意義を持っている。

中国文明は5000年にわたる長い歴史を持っている。中国文明にある優れた伝統文化の伝播と交流は、人類社会の進歩を促進していた。イギリスの学者ジョセフ・ニーダムは『中国の科学と文明』という著作で次のように述べている。「中国は、科学技術ばかりでなく、他に多くの精華も人類に貢献できる。中国人は人の尊厳と篤信し、頭脳労働と肉体労働を尊重し、内在的道德品行および全世界で抑圧されている人々に同情することを重んじる。世の中は中国文明によってはぐくまれたことを認識すべきである」⁽²²⁾。人類社会が21世紀に入ってから、世界経済一体化と地域経済集団化に伴って、各民族、各国家は新しいチャレンジに直面している。情報化と交通技術が発展するにつれて、異なる文化や価値観の間の交流のスピードはしだいに増し、交流の範囲もますます拡大している。同時に、産業化の推進によって各国家、各地域のエネルギー、鉱産物、木材の需要量が大幅に増加している。グローバル経営の場合、さまざまな経済的利益集団と政治機関が絡み合っていることにより、文化衝突、経済衝突、政治衝突までも頻繁に起きている。飢餓、戦争、地球温暖化は人類の進歩と発展に由々しき影響を与えている。上述のような各種の矛盾を

⁽²²⁾ 江藍生『新世紀の東西文化交流に向かう』から再引用。王橋、駄田井正/編『東アジア社会経済発展の比較』社会科学文献出版社、2004年、51頁。

取り除いて衝突を確実に解決し、調和世界を築くためにはどうすればよいのだろうか。多方面にわたって「共生」という理念を広げて、「大同」という思想を人類社会におけるさまざまな問題を処理する考え方に据えるならば、この世界はきっといつそう美しくなるだろう。康有為の述べたとおり、「大地に生まれた以上、地球上の人々はみな同胞である。相互理解を深めさえすれば親しくなれる」⁽²³⁾ のではなかろうか。

国際関係や国際情勢と取り組むとき、「仁」から物事を考えて、東西の質的に異なる文化についての交流と融合を強調し、礼儀と礼状を重視し、調和と「共生気質」を通して国と国、民族と民族との間にアイデンティティーと共通認識を求め、「互恵共栄」という原則にもとづいて目標に達成できるとすれば、ハンチントンによる「文明の衝突」は「文化のアイデンティティー」に変えることができ、調和世界も実現されるだろう。

⁽²³⁾ 池田・チャンドラ『東洋の哲学を語る』、186頁。